

カナダの都市景観

正 井 泰 夫

I. カナダ都市の発展過程
II. 民族的多様性と都市景観

III. 立体景観と地下街の発達
IV. むすび

カナダの都市景観に関する情報は、時折伝えられるジャーナリズム関係のものを除くと、ほとんどないのが現状である。本研究では、主として1982年10月一杯に行った現地調査に基づき、その現況を景観論的に考察する。

I. カナダ都市の発展過程

白人渡来前のカナダには、都市といえるような集落は全く存在しなかった。第3次産業を中心とする都市機能によって主体的に形成される集落、つまり都市は、白人渡来後の発達によっている。しかし、当初の探検時代には、都市といえるような集落の発達はなく、17世紀に入ってから毛皮取引以後による、Québec および Montréal は、17世紀における毛皮取引の町として商人によって建設された。これは初期においては小規模な団郭都市であった。1660年代になって、ルイ14世の代に、フランス政府の管轄下に入り、以来、イギリスに実権を奪われるまで、フランス人の町として存在し続けた。New Orleans まで、フランスの版図が南下した全盛期においては、Québec がその行政上、商業上の中心であった¹⁾。

1749年にイギリスによって Halifax の町が建設されたが、これはその北の、やはり同じノヴァスコシアにある Louisbourg (フランスの町) に対抗するためのものであった。アメリカ独立革命の頃にも、Halifax はイギリス海軍の拠点として機能した。1794~97年には、現存する砦 (Citadel) が建設された。いずれにせよ、カナダ大西洋岸地域におけるイギリスの覇権が強まり、以後、カナダはイギリス型の都市発達を中心に、ケベック州におけるフランス型の都市発達を従とした、二元型の発達を示すことになる。

この二元型の都市発達は、19世紀の中頃より顕著となった商業活動の活発化によって大きく変貌するようになる。それまでの Lower Canada (ケベック州) と Upper Canada (オンタリオ州) の個別的な発展が、特に1867年の Confederation によって、一つの国としての発達が進められることになったためである。その際、イギリス型主導に偏りがちであったが、実際には、南のアメリカ合衆国における都市建設の影響が強くなったと見てよい。

ヨーロッパを強く意識した植民地型都市分布から、カナダは次第に、この大陸的規模の土地に根ざ

した都市分布を示すようになる。いうまでもなく、内陸都市の発達である。1833年には Welland Ship Canal が一応完成し、ナイアガラ滝を迂回する水路ができていたためもあって、19世紀の後半から20世紀にかけては、大西洋より数百ないし千数百キロの内陸が、一応は水路によって連絡されることになった。特にオンタリオ州南部のヒューロン・エリー・オンタリオ湖に囲まれた地域の農業的発達は目ざましかった。同時に西ヨーロッパにおける小麦需要の増大に応じて、プレーリー地方の開拓が進み、その鉄道ターミナルとして、Port Arthur と Port Williams (現在の Thunder Bay) も大いに発展した。こうして、内陸部奥深くにも、Winnipeg, Regina, Saskatoon, Calgary, Edmonton などの都市が発達した。

1875年には、その後の太平洋岸の拠点都市となる Vancouver が建設された。当時は Granville と呼ばれていたが、1886年にはカナダ太平洋鉄道が東部よりここまで延長された。これは、アメリカ合衆国の最初の大陸横断鉄道(1869年)よりおそかったが、それにしても19世紀中にこの大陸の両岸が鉄道で結ばれていたのである。

工業の発達が都市化を促進するのは、どこでも同様である。カナダでは1870年代に工業化が始まったとされるが²⁾、これは20世紀に入って加速する。オンタリオ州南部の Petrolia では1865年以来石油が採くつされ、また、のちには Edmonton 一帯が石油の大産地へと移行する。こうして、1920年代以後のカナダは、アメリカ合衆国とほぼ同時期に、自動車(トラックを含む)が一般的交通手段となり、都市化も自動車を念頭に置いたものへと変容する。郊外住宅地の大発展が田園都市運動の影響を強く受けたことはよく知られている。

II. 民族的多様性と都市景観

カナダは多民族国家である。カナダの多民族国家としての民族分布型は、旧大陸諸国とは違って、どこにそれぞれの民族が住むかは、原則的に自由選択に任されており、明確な分布地域・地区をもっていない。この点、新大陸型である。しかし、すでに多くの研究がなされているように、それぞれの民族は、特にいわゆる少数民族の場合には、ある程度集中的な居住形態をとることと、フランス系カナダ人(国民の約4分の1)の大部分は、都市と農村の両者にわたって、明確な民族分布を示している。後者は、どちらかといえば、旧大陸型の民族分布である。

カナダの都市景観にも、このカナダの民族的多様性の現状が強く反映している。1960年代頃より強くなってきた少数民族の文化を認知しようとする動きは、カナダの各地でますます強まってきているといわれる。政策的にも、この多文化主義が強く押し出されている。その結果、カナダの都市景観は、一つの文化では説明できないほどの多様性があるといわれている。「人種のるつぼ」から「民族のモザイク」への移行である。

カナダの都市景観に占める民族的多様性は、筆者の目からすると、いわれているほどには強烈なものとは映らなかった。というのは、統計が示す人種・民族の多様性とはあまり関係なしに、むしろ統一性が強く出ているからである。もちろん、これは過去の Assimilation プロセスの結果であるかも知れない。しかし、現在進行中の民族文化を強く指向した街並み景観づくりにしても、きわめて特定

の商店街に限られているに過ぎない。

カナダというイギリス（アメリカ）またはフランスの影響の強い環境の中で、民族的街並み景観の中で最も目立つのは、やはりチャイナタウンであろう。Toronto および Vancouver には、カナダの諸都市の中でも特に大きいチャイナタウンがある。英連邦の一国として、ホンコン辺りから多くの中国系住民がきているからであり、確かにかなり異質的景観を示している。しかしよく見ると、歩いている人の中に中国系が多いことが、最大の異質さを示す要素であるかも知れない。もちろん、店の看板に相当数の漢字が使われていることも、言語景観をカナダの標準的なものから大きく離していることも事実である。

チャイナタウンにおける建築様式は、ごく一部のものを除くと、ほぼ完全に一般的なカナダ（北アメリカ）様式である。景観上の違いは、前述のように歩く人の姿と看板と販売されている品物の違いなのである。建物の様式にまで中国式影響はほとんど及んでいない。これは、通常のカナダ式商店街が、ごく僅かの形態変化しか伴わずにチャイナタウン化したからである。

言語景観にしても、使用されている文字の過半数はローマ字であり、文字に関する限りローマ字文化圏の一部であることが分る。ただ、漢字という全く異なる系統の文字の使用も相当に多く、文化の多様性を示す指標として十分に認知できる。ローマ字で表示されている内容の中にも、店舗名として中国語が使われていることが多く、例え漢字でなくても、一般の人びとにとっては異国情緒と思えることも事実である。

中国系住民が集中して居住している住宅地は、歩いている人の姿以外はほとんど完全にカナダ的景観であり、そこに東洋を感じることは、少なくとも外見上は全くないといってよい。文化景観上の多様性は、商店街に限られるといってよい。

同様なことは、イタリア系、ギリシャ系、スペイン系、ポルトガル系、ユダヤ系などについてもいえる。それらの住民が集中して居住しているところへ行っても、それがそれぞれの母国の文化に強く影響されているところはきわめて稀であり、この場合でも景観上の多様性はほとんど商店街に限られる。しかも、その多様性はチャイナタウンと比べるとはるかに不明確であり、ややもすると気付かない程度の差である。

例えば、ギリシャ人の多い地区の街並み景観を見ても、建築様式はほぼ完全にカナダ式である。文字に代表される言語景観も、大部分が英語で、時折りギリシャ人の名前がローマ字で表記されるように過ぎない。ギリシャ文字の看板を見つけることは、稀にしかできない。

日本語または日本文化を表わすような都市景観も、ほんの僅かではあるが見られる。チャイナタウンには日本商品を売る店が、ローマ字表記で日本語名の看板を出している。また、白人系カナダ人の経営する日本の伝統的品物売る店もあり、日本語の看板が出ている。しかし、これらは全体の中できわめて例外的なものであり、日本的なものが大量に存在し、街並み景観の重要な構成要素となることは、現在のところはない。この点では、Los Angeles の Little Tokyo、あるいは San Francisco の Nihon-machi の程度よりはるかに小規模であり、無視しうる程度と見てよい。

日本の都市景観における文化的多様性は、ほとんどすべての住民がいわゆる日本文化の担い手であ

る日本人によって形成されたものである³⁾⁴⁾。若干の例外もあるが、英語名の店、フランス語名の喫茶店、おびただしい数のローマ字使用の看板、欧米風の建築様式など、伝統的な文化景観との並存または伝統的な文化景観の欧米化が、いたるところで顕著に見られる。

これに対し、カナダでは、確かに多種多様な民族が集まり、さまざまな文化をもちながら、景観的には顕著な画一化が行われ、統一性が保たれている。多様化への努力はもちろん認められるが、全体を大きく変えるほどには至っていないと見るべきであろう。

Ⅲ. 立体景観と地下街の発達

カナダ型都市の立体景観は、全体としてはアメリカ型である(第1図)。同人口規模の都市で比較すると、アメリカの都市よりも市街地の及ぶ範囲がやや狭い。スプロールの度合がやや低いと見てよい。一般にカナダでは、イギリスとアメリカの間であるといわれる。その結果もあって、アメリカと西ヨーロッパの中間的な様相を示しているのであろう。

アメリカと同様に、カナダも自動車依存型社会である。その結果、市街地の人口密度を低くしなければ、自動車社会を十分に機能させることができない。Toronto や Montréal のように、地下鉄・バス・郊外電車網をもっている都市もあるが、ここにおいても、自動車の使用が第一義的である。Toronto では市電の利用も盛んであるが、これとて、全体の傾向を大きく変えるものではない。Winnipeg や Vancouver など、他のすべての都市では、自動車がほとんど唯一といってもよいほど

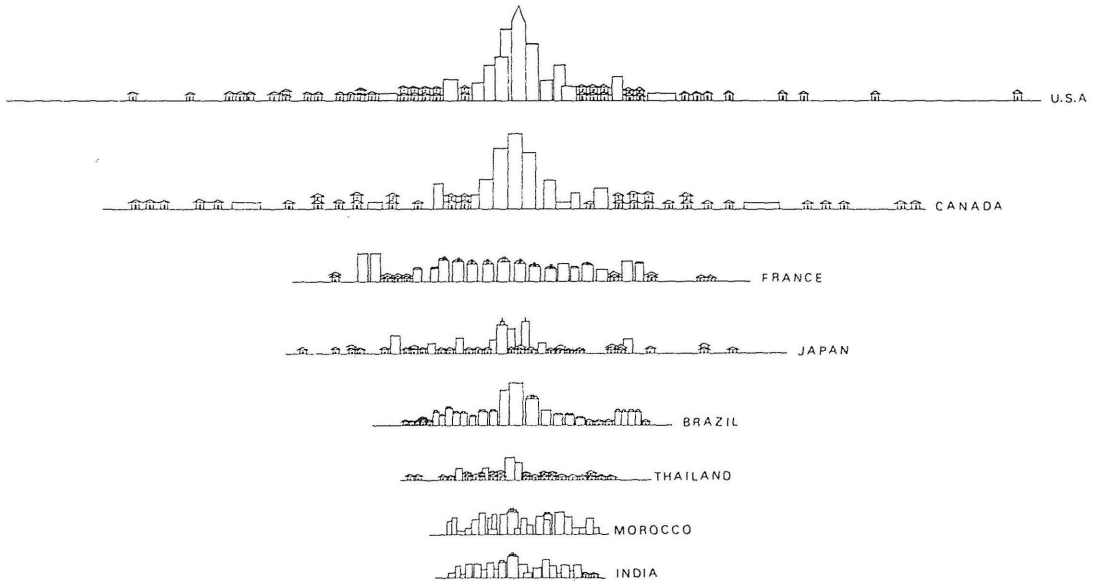


Fig. 1 Townscapes of Some Selected Countries, 1982 (Masai)

の輸送手段となっている。従って、市街地人口密度は低い。

ほぼアメリカに近いだけの低い市街地人口密度がカナダで認められる理由としては、長い間の高い経済力、広い土地資源、1920年代以来の自動車の大量利用などのほかに、アメリカと同様、開拓の初期以来、馬車交通を予想して建設された道路がある。例えば、Toronto における初期の街路幅は、車道（馬車用）が22フィートで、その両側に11フィートずつの馬車駐車スペースがさり、さらに溝をへだてて、両側に11フィートずつの歩道があった。これは標準的な街路の幅であり、合計66フィートであった⁵⁾。大通りはもっと広い。裏通りもあるが、建物の表玄関へ通じる通は、少なくとも66フィートの幅をもっていたのである。アメリカと同様、西ヨーロッパの伝統を引いた都市計画が、初期の段階から行われていたのである⁶⁾。

カナダ都市における高層化は、アメリカ並みである。最大都市である Toronto（大都市圏人口280万、1980年）と2位の Montréal（280万、1980年）でも、New York などより人口規模がはるかに小さいので、前者の最高ビルは952フィート（First Canadian Place）、後者のそれは624フィート（Place Victoria）であって、Chicago の1454フィート（Sears Tower）、New York の1350フィート（World Trade Center）よりも低い。しかし、大都市圏人口706万の Los Angeles の最高ビルが858フィート（United California Bank）、289万の Houston の1002フィート（Texas Commerce Tower）、276万の Boston の795フィート（John Hancock Tower）などと比べると、カナダ大都市は一応アメリカ型都市と高層化の面では似ているといえる。ちなみに、Toronto には高さ1821フィートの CN Tower があり、支柱などで支えられない建築物としては、世界最高を誇っている⁷⁾。

地下街の建設も、カナダ都市の大きな特徴である。アメリカでは地下街はその割には発達していないが、カナダ東部の2大都市である Toronto と Montréal は、きわめて大規模な地下街の建設を続けてきた。それぞれの都心部には、地下都市といってもよいほどの規模の地下街・地下通路があり、地下鉄網と合わせて、深雪都市の行き方として注目されている。

量的把握はまだできていないが、これら両都市の地下街は、店舗数においては東京・大阪・名古屋などの地下街にはるかに劣ると考えられ、少なくとも人口割りには、実に壮大な面積規模をもっているようである。例えば Montréal においては、ダウントウンの相当部分が、相互に地下道で連絡できる構造になっており、しばしば1m以上の積雪を記録する大都市の生活を容易にしている。

IV. む す び

カナダの諸都市は、その大都市圏における人口規模をさらに拡大しつつあり、従って市街地面積も増加しつつある。発展過程の差により、大西洋岸、ケベック州、オンタリオ州、プレーリー地方、ブリティッシュコロンビア州などで、それぞれ異なる都市景観を見せているが、全体としていえることは、近代的都市景観による地域差の解消の方向である。これは世界的規模で見られるものであり、カナダの特性とはならない。この世界的把握の近代的都市景観は、隣国のアメリカ合衆国で特に顕著なものであり、この点において、カナダの都市景観は北アメリカ文化圏に属するものとして容易にとらえられよう。

さらに詳細に見ると、急速な画一化に対する反省として、次の3つの方向を強くとっていることが指摘される。1つは、多民族国家の特性を生かした街並みづくりであり、特にレストラン街に見られる。これは十分に成果をあげているとはいえないが、ある程度の個性化には成功している。もう1つは、都市中心部の一部に、「エレガント」ということばが似合うようなシックで落ち着いた街並みづくりが進められていることである。ブティック店の並ぶところに多い。第3は、歴史的街並みの保存と復元である。これは、しばしば第1・第2の動向とつながっている。

一口にいうと、カナダの都市景観は、北アメリカ型の都市景観（立体化と田園都市的郊外住宅地）の大枠の中で、ますますケベック化を進めようとしているケベック州をも含めて、全体としては、多民族国家の行き方の一つとしてのモザイク化よりも、近代的都市景観の普及という統一化へ向っていると見えよう⁸⁾。

本研究を行うに当って、Western Ontario 大学の A. K. Philbrick 教授、E. Bjorkund 博士、Guelph 大学の G. A. Stelter 教授、Saskatchewan 大学の D. Smith 教授、York 大学の J. Saywell, R. Cook, H. V. Nelles 教授、Montréal 大学の R. Garry 教授、門彬氏、G. Pineault 氏、Donner Canadian Foundation の G. Wright 博士、Mount Allison 大学の E. Ross 教授、National Archives の R. Vézina 氏、その他多勢の方々、カナダ外務省および駐日カナダ大使館の方々から一方ならぬお世話をいただいた。深く感謝する次第である。

注・参考文献

- 1) G. A. Stelter and A. F. Artibise (1982) : *Shaping the Urban Landscape—Aspects of the Canadian City-Building Process*. Carleton Library Series.
- 2) G. A. Stelter and A. F. Artibise; *ibid*, p.18.
- 3) 正井泰夫 (1969) : 言語別・文字別にみた新宿における諸設営物の名称と看板広告. 史苑 29—2.
- 4) 正井泰夫 (1983) : 新宿の喫茶店名——言語景観の文化地理. 筑波大学地域研究 1.
- 5) City of Toronto Archivesの資料による.
- 6) 正井泰夫 (1979) : アメリカの古都ウィリアムズバーグ. 地理 24—7.
- 7) Newspaper Enterprise Association (1982) : *World Almanac 1982*.
- 8) G. Merrill (1967) : Regionalism and Nationalism. In John Warkentin: *Canada—A Geographical Interpretation*. Methuen.



1. Downtown Vancouver surrounded by glaciated topography and foliage.



2. Grain elevators at Rosthern, a small central place in the Prairies.



3. Skyline of downtown Toronto. A typical North-American townscape — a mini-Downtown Manhattan.



4. Rapidly developing underground shopping malls and pedestrian passages, indicating a type of measures for deep freeze.



5. Shopping mall of Eaton's Centre, Toronto. At least two levels under ground level. Canopy is a transparent arch.



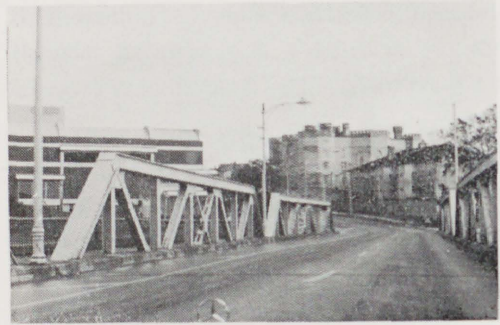
6. Mt. Royal. A green-covered high-class residential area, Montréal.



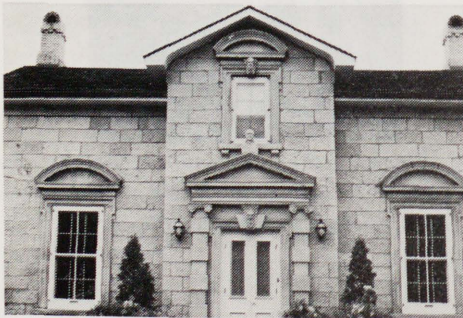
7. French-style Vieux Montréal. Stone and brick dominate the townscape.



8. A residential area near Université de Montréal. Mostly apartment houses.



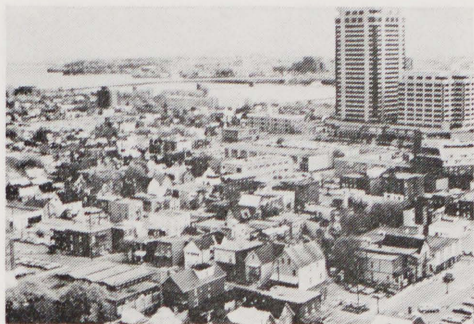
9. Historical structures on the Thames in London, Ont.



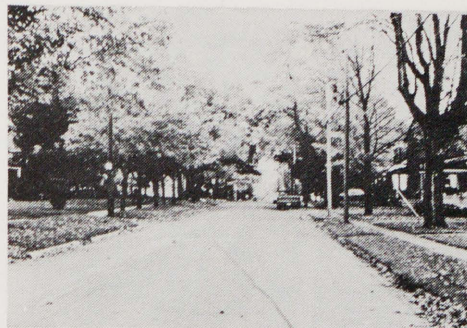
10. Guelph, an old British-style town, has many whitish limestone houses.



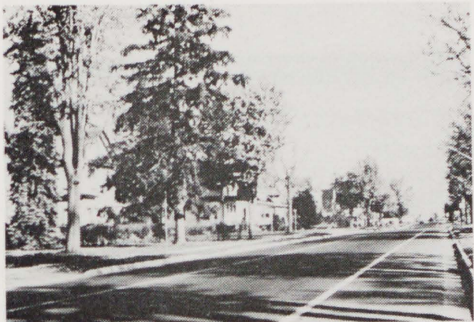
11. Renovated Ottawa's downtown mall. Low population density is quite characteristic to most of Canadian downtown scenes.



12. Old-fashioned houses near downtown Ottawa. Compactness never appears.



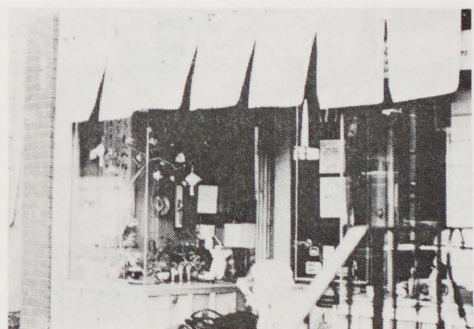
13. A residential area of Paris, a small town in southern Ontario. Another typical North-American-style urban landscape.



14. A better residential area of once flourishing town of Petrolia.



15. Port town of Halifax established by using topographical conditions that enabled easy anchorage and overlooking fortification. Citadel on a hill at right edge.



16. The only Japanese folk art shop in Toronto. This is operated by a white man.



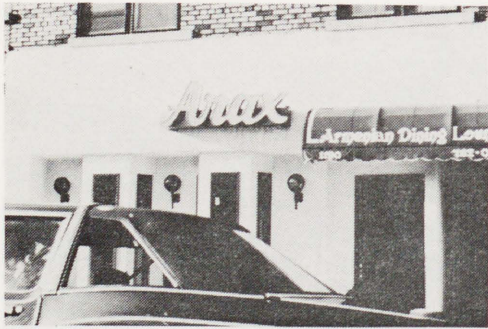
17. A Japanese food store in Chinatown of Toronto. Also sells goods. Japanese letters are not used for signs.



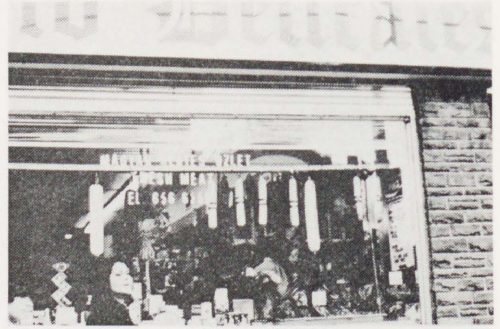
18. A Korean restaurant in Chinatown of Toronto. Hangeul letters are characteristic.



19. Main portion of Chinatown of Toronto. Here Chinese signs are most prominent, but house types are 100% Canadian.



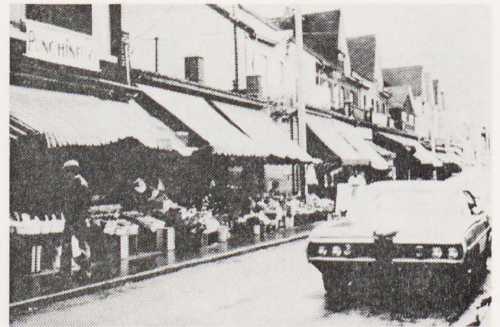
20. An Armenian restaurant in Toronto. An example of the minority's activities.



21. An Hungarian restaurant in Toronto. Hungarian language is to be seen.



22. A so-called Italian town in Toronto. Some shops have Italian names but most others have English ones.



23. Portuguese town in Toronto. Ethnic characteristic is to be seen relatively prominently as in the case of color preference for house walls.

Some Aspects of Canadian Townscape

Yasuo MASAI

The average Canadian city tends to have high-rise buildings in a geographically central part. The height of buildings diminishes very sharply around the central part and levels off, with some fluctuations, to peripheries. Mt Fuji-like general slope of the townscape skyline is extended far out as if it is fading into the countryside. In this respect, the so-called North-American townscape is clearly recognized in Canadian cities. By Japanese standards, the outer edge of the built-up areas should be said to be very distant from the center, but the time distance, which does not require so long as in Japan, often disconcerts the Japanese observation.

A comparison with the American counterpart will reveal that the Canadian townscape is somewhat different especially at the peripheries of the built-up areas. The Canadian city tends to end with a relatively more sharp edge at the peripheries. In other words, clustering of suburban homes is clearer in Canada, although both Canadian and American cities have a common trait of sprawling. This is largely due to the fact that the zoning regulations in Canada are stricter than in the US. To the Japanese observer, however, such a strict zoning looks a little too monotonous because of the single-purpose land uses that abound in the city. This, in turn, leads to an impression of orderliness which is not often seen in the Japanese city.

Fig 1 illustrates schematic profiles of the townscape in Canada in comparison with that of the US, Japan and other countries in the world. As is shown well, the Canadian townscape profile resembles the American one, altogether constituting the North-American townscape. Although there is some regional variances, this general form is said to prevail over the Canadian territory from the Atlantic to the Pacific.

A comparison of Toronto with Montréal, both having about the same population, reveals that Montréal's townscape has many more apartment-type buildings. This may be a common characteristic to the cities of Québec Province, but it has not been documented yet. There is a tendency among older cities to have more numerous older buildings. As a result, eastern cities and western cities have a regional variance respectively. It is possible to say that small towns in Northwest Territories and Yukon Territory, especially those in the Arctic, could form another regional variance.

Ethnicity still prevails in the Canadian city. There is a clear tendency among each ethnic group to live together, causing clear separated living between different ethnic groups. Ethnicity in townscape is generally encouraged, and this fact is often reported or even propagated loudly. Foreign visitors may easily find the differences in townscape while walking along streets. But this distinction usually is restricted only to some shopping streets or areas. Even in these shopping streets or areas, distinction is normally possible only by letters used as signs of shops or establishments and also by ethnically

different people themselves. Architectural styles, however, do not differ much from the ordinary (typically Canadian) streets. Even in Chinatowns of Toronto and Vancouver, the two largest of that sort in Canada, only several buildings out of hundreds have characteristically Chinese architectural styles. Diversity in Canadian townscape still exists, and in some cases, it is encouraged to be so, but the general trend is to unify or assimilate, rather than variegate, originally different architectural styles. It could be considered that Canada's townscape does not vary so much as its variety in ethnicity. This is sharply contrasted with the fact that Japan, a mono-ethnic nation, is consisted of various cultural traits intentionally introduced without sizable immigration of people.

A typical example is Toronto. There are many ethnic shopping streets there. But most of the street names are English. Even in Chinatown, the street names are English such as Dundas. Only the names of the shoppes may be Chinese. To be sure that even Chinese shops normally have their sign names in alphabet -- a few use Chinese characters solely. Around there are some sections where Chinese people live in more or less clustered form. All the houses look like ordinary Canadian houses. It is extremely difficult to recognize Chinese characteristics there except for people walking by. Some would argue that Chinese characteristics are tremendous in Chinatown because many streets have English names written in both English alphabet and Chinese character. This is, however, to be ignored if compared with Japanese townscape in which numerous street names are written in both kanji and romaji or even alphabet in English (e g., Sakura-dori Ave). In Japan, juxtaposition of both Japanese (Eastern) and Western architectures is ubiquitous. This phenomenon is not exceptional at all but a nationwide thing. In contrast, the patchwork of ethnic quarters in Canada is only limited to the functions and the store signs but the architectures are nearly 100% Western. Of course, variety can be recognized within architectural form. English vs French, Greek vs German, all of these exist in the Canadian townscape, but all of them belong to Western type (including modern international type.).

In sum, the mono-culture-oriented townscape in multi-ethnic Canada is to be contrasted with the multi-culture-oriented townscape of mono-ethnic Japan.

The author deeply appreciates academic supports by the scholars mentioned in the last paragraph of the Japanese-language portion of this paper and the financial support by the Ministry of External Affairs of the Canadian Government and the Canadian Embassy in Tokyo.